



TITLE:

静脩 Vol. 29 特別号 (1993.3) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 29 特別号 (1993.3) [全文]. 静脩 1993, 29(特別号)

ISSUE DATE:

1993-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66008>

RIGHT:



京都大学附属図書館年間統計

1991年度

京都大学附属図書館では、この一年、従来の利用統計の改善を検討してきた。これまでの統計は新館開館の翌年度である昭和60年度以来のもので、多数の数値データや表が詳細に記述された大部なものであった。それに対する一定の評価もあったが、コンピュータの導入等によって種々の利用統計の採取と加工が容易になったこともあり、今回書式を大幅に変更した。これにより、統計作業の新たな定式化を試みるとともに、統計データをマネジメントや実務にフィードバックすることを目指している。

この種の統計は、年度ごとの実績を明らかにすると同時に、継続的な積み重ねによって、図書館の利用動向や利用者のニーズを把握できるようなものでなければならない。今回の統計では、貴重書の閲覧上位リスト、出陳依頼上位タイトル及び参考調査依頼の相手先別など、これまで現れなかったデータも明らかにした。

この統計が、図書館運営の基礎資料として、また業務改善の参考資料として役立つことを期待している。

一 目 次

統計の部

I. 利用統計概要	3
II. 開館状況および利用対象者状況	5
III. 入館利用状況	6
IV. 一般図書貸出状況	7
V. 閲覧利用状況	
一般図書	9
雑誌	10
参考図書	11
特殊資料	12
新聞	13
VI. 種々の利用統計	
AV 資料	14
参考業務	14
OPAC/TSS	16
相互利用	17
VII. 予算統計	19

解説の部

利用統計等について	20
予算統計について	24

あとがき	24
------------	----

I. 利用統計概要

蔵書数 737,437冊

(和書 481,486冊、洋書 255,951冊)

★ 開架図書 71,944冊

(和書 65,619冊、洋書 6,325冊)

★ 雑誌タイトル数 19,363種

(和雑誌 9,227種、欧文雑誌 10,136種)

※外国雑誌センター、工学部共通及び化学系雑誌等を含む。

開館延日数 264日

(平日 220日、土曜日 44日)

★ 開館延時間 2,864時間

入館者数 656,259人

(1日平均 2,486人、1時間平均 229人)

★ 入庫検索者数 10,083人

(1日平均 38人)

利用対象者数 23,216人

(平成3年9月30日現在)

※利用対象者数：利用証登録者数

総利用冊数 120,740冊

(うち・学外者利用冊数 11,474冊)

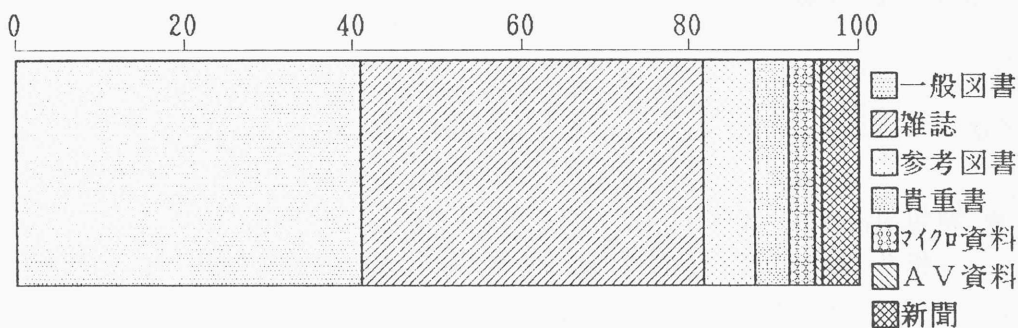
総利用人数 53,659人

(うち・学外者利用者数 1,907人)

施設利用

★ タイプ室 149件、 共同研究室 30件、 研究個室 83件

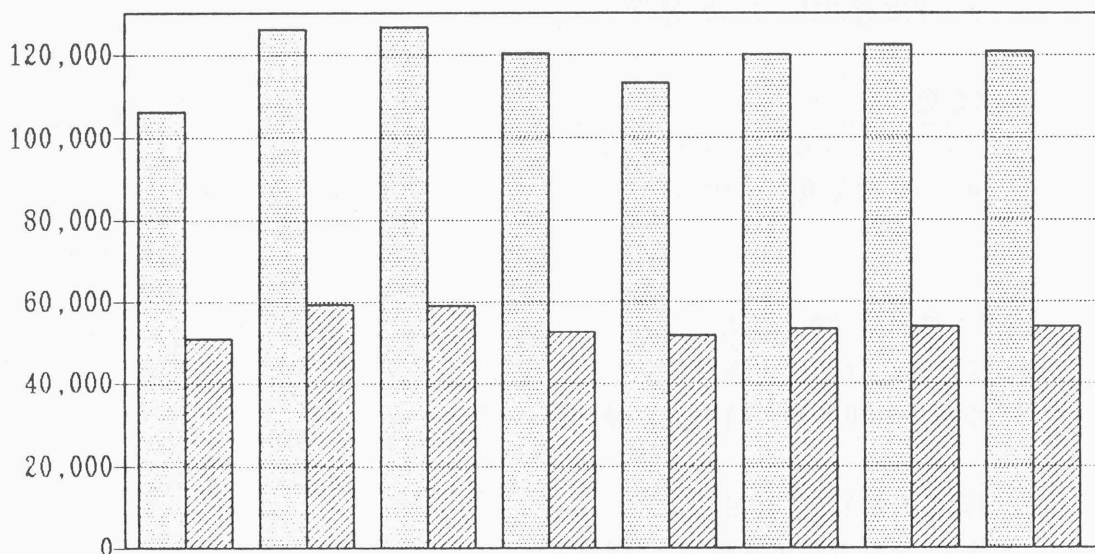
資料構成概略



※資料の種類により、カウント方法が異なるなどで比率の把握がむづかしいため、おおよそで図示した。

京都大学附属図書館利用推移

(単位：冊、人)



	S.59年度	S.60年度	S.61年度	S.62年度	S.63年度	H.元年度	H.2年度	H.3年度
□利用冊数	106,084	126,311	126,696	120,412	113,136	120,034	122,353	120,740
■利用人数	50,688	59,255	58,904	52,501	51,330	53,353	53,705	53,659

※総利用——総資料（AV資料を除く）の閲覧及び貸出数

※昭和59年度より開架制をとっているため、現在では本来の閲覧数を把握することは不可能である。

※昭和63年度より工学部専用の複写機が3台設置され、貸出手続きなしに利用できるようになったため雑誌についても相当数の利用があるが、実数はつかめない。

Ⅱ．開館状況及び利用対象者状況

(1) 開館状況

◆開館日数 264日

区 分	平常開館	延長開館	開館延時間	開館延時間内訳	
				平常時間	延長時間
平 日	32 日	188 日	2,512時間	1,760時間	752時間
土曜日	0	44	352	132	220
計	32	232	2,864	1,892	972

【注】 平常開館：平日 9時～17時、土曜日 9時～12時
延長開館：平日 9時～21時、土曜日 9時～17時

◆開館時間

平日	9時 ～ 21時まで
土曜日	9時 ～ 17時まで
1月 6日～1月10日まで 7月21日～8月 4日まで 8月16日～9月10日まで	9時 ～ 17時まで

◆休館日

- ◇日曜日、祝祭日（振替休日を含む）
- ◇本学創立記念日（6月18日）
- ◇図書整備等、業務上の都合による休館日
4 / 1～4 / 5、8 / 5～8 / 15、12 / 25～1 / 5
毎月末日（末日が日曜日・祝日にあたる場合は、その翌日）

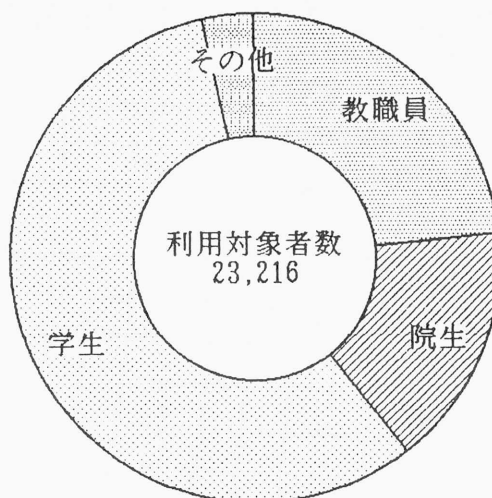
(2) 利用対象者状況

登録者総数 23,216人
（平成3年9月30日現在）

内訳

教職員	5,421人
院 生	3,737
学 生	13,266
その他	792

※ その他には卒業生、生協職員、スタンフォード日本センター学生等を含む。



Ⅲ. 入館利用状況

年間入館者数 656,259 人

対前年度比：1.9% 増

学	入 館 機	651,089 人
内	マニユアル	3,394 人
学	閱 覧	1,238 人
外	見 学	538 人

開館日1日当り	2,486 人
” 1時間当り	229 人
” 1日当り最多	4,711 人

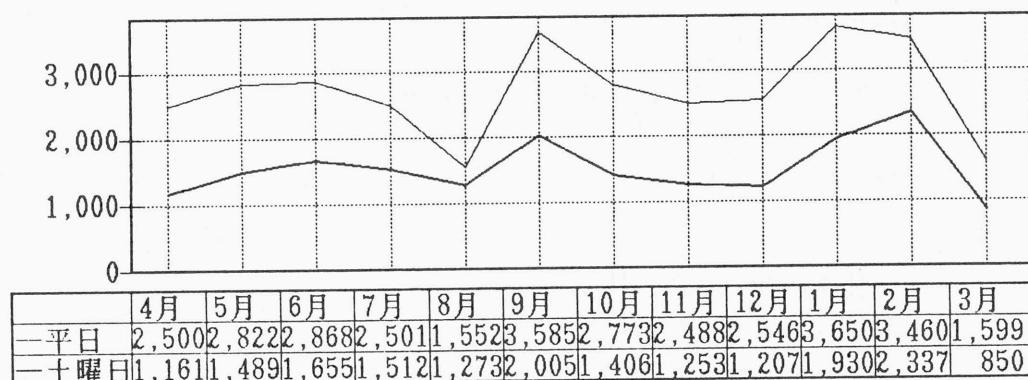
※ マニユアル：忘れたり紛失等による利用証不携帯の入館者。

閱 覧：特別閲覧願（学外者）手続きによる入館者。

見 学：事前見学申請なしの見学者の入館。

1日当たり入館者（入館機）

（単位：人）



入庫検索者数 10,083 人

対前年度比：10.7% 増

開館日1日当り	38 人
入館者比	1人/65人

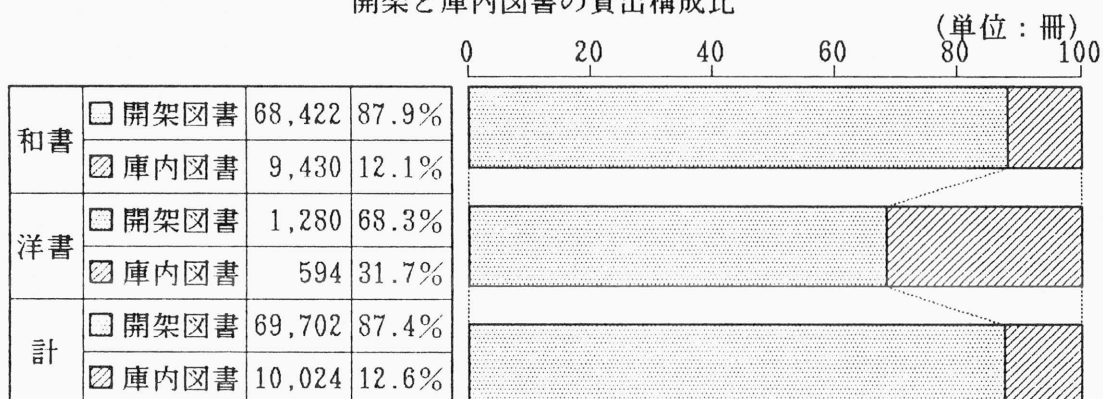
Ⅳ. 一般図書貸出状況

年間貸出冊数	79,726 冊
年間貸出者数	43,435 人
1日平均利用冊数	302 冊
1人当り平均利用冊数	1.8 冊

対前年比 2.3% 減

※貸出対象者：本学学生及び教職員

開架と庫内図書の貸出構成比

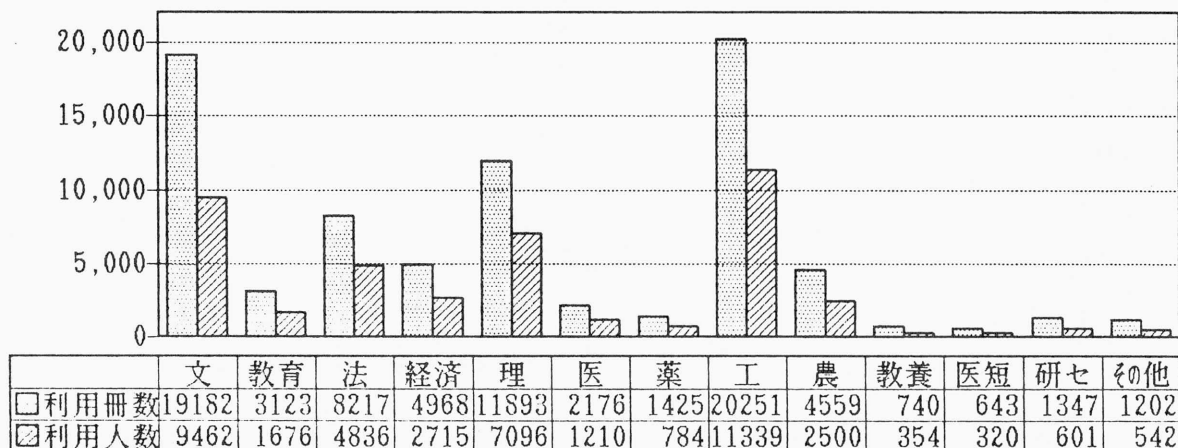


※開架図書：利用度の高い新しい図書、約7万冊

庫内図書：古い図書及び新しいものでも専門的な図書

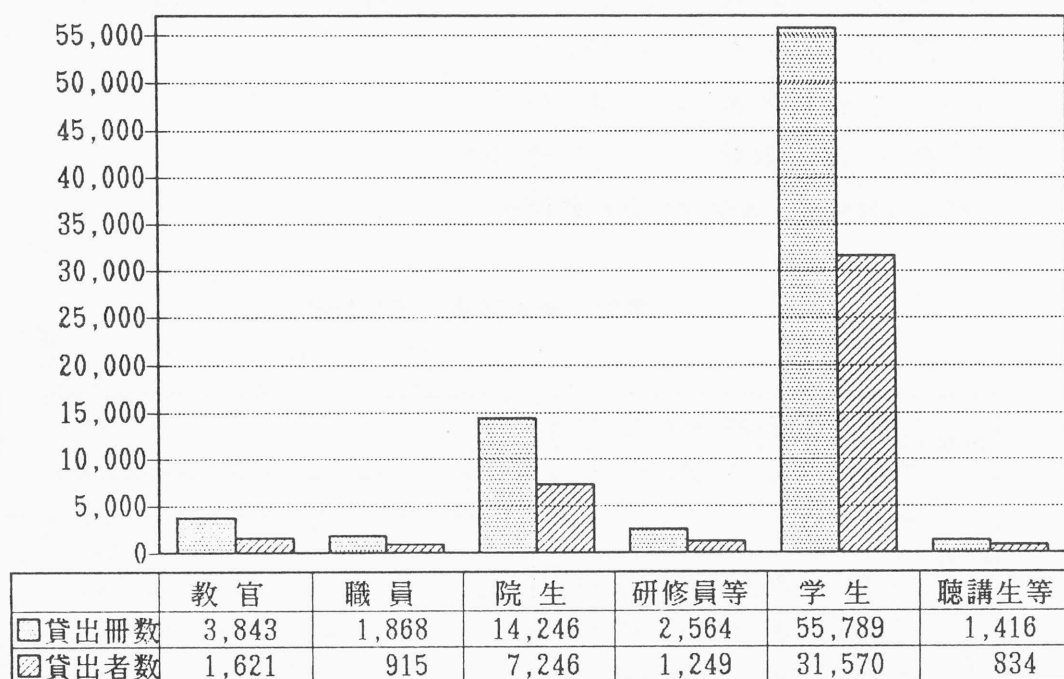
部局別貸出利用状況

(単位：冊、人)



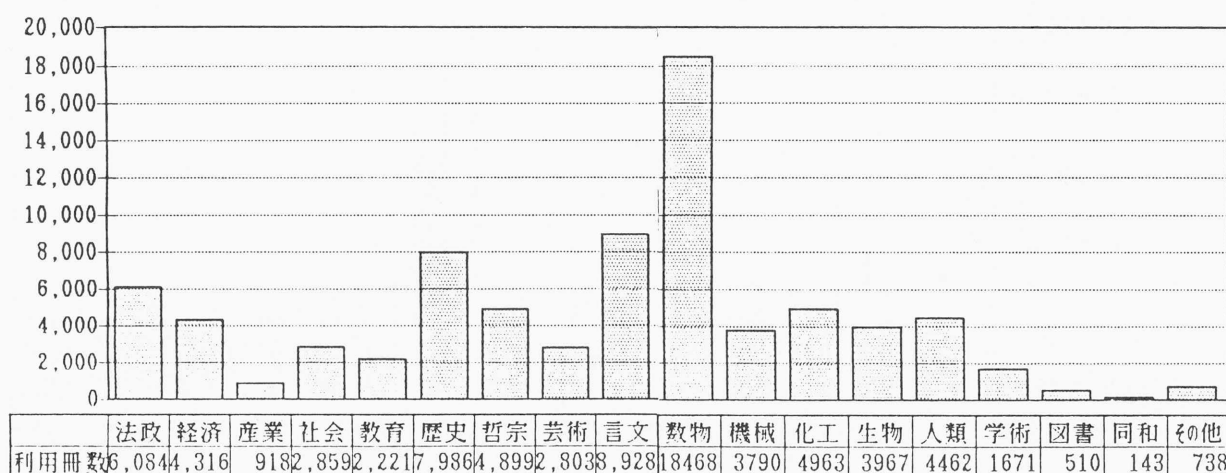
身分別貸出利用状況

(単位：冊、人)



分類別貸出利用状況

(単位：冊)



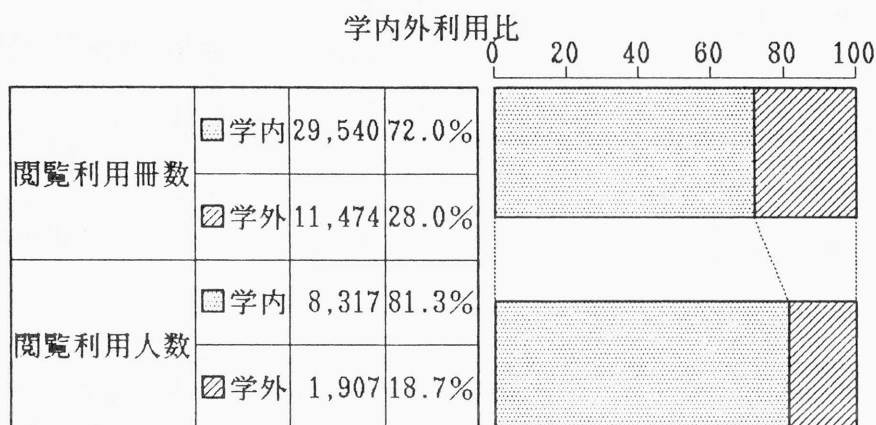
V. 閲覧利用状況

閲覧利用冊数	41,014 冊
閲覧利用人数	10,224 人

対前年比 0.7% 増

※一時貸出を対象にしている。

自由接架による利用数は含まれない。



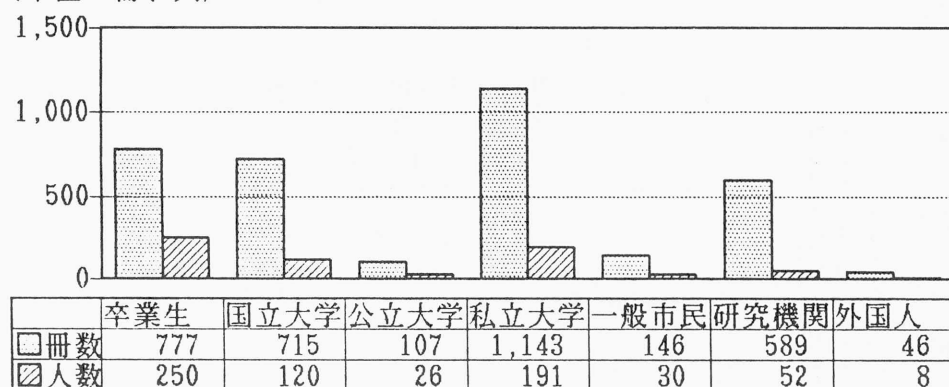
一般図書利用状況

学外者利用	3,523 冊
-------	---------

※学内者の一時貸出は貸出扱い

学外者所属別利用統計

(単位：冊、人)

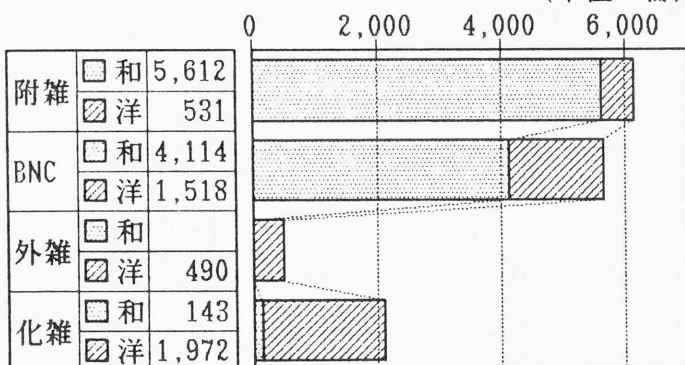


雑誌利用状況

年間利用冊数	14,380 冊
年間利用人数	5,967 人

所蔵種別利用

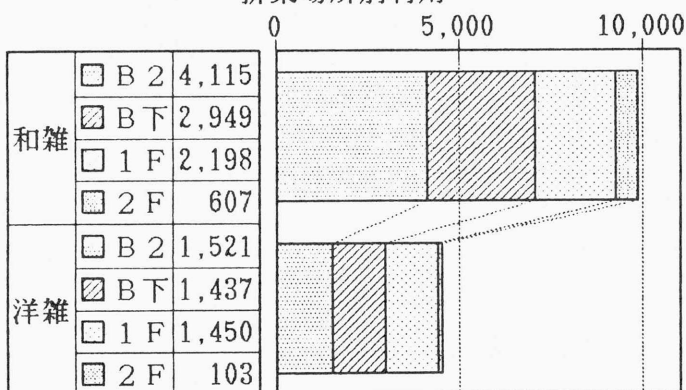
(単位：冊)



※

附雑：附属図書館雑誌
BNC：バックナンバーセンター雑誌
外雑：理工学外国雑誌センター雑誌
化雑：工学部共通及び化学系雑誌

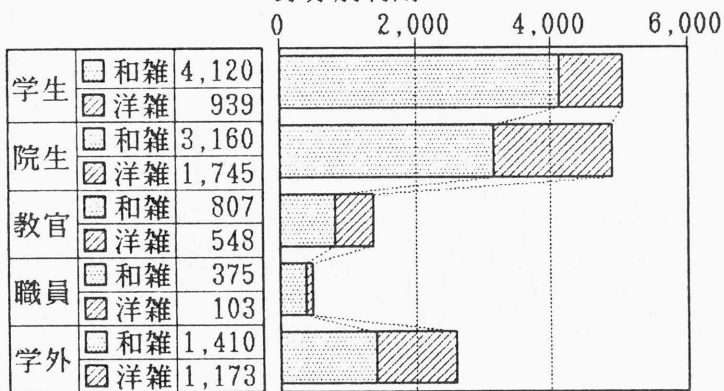
排架場所別利用



※

化雑の利用については工学部専用の複写機が3台設置されており、貸出手続きなしに利用出来るため、相当数の利用があるが実数はつかめない。

身分別利用



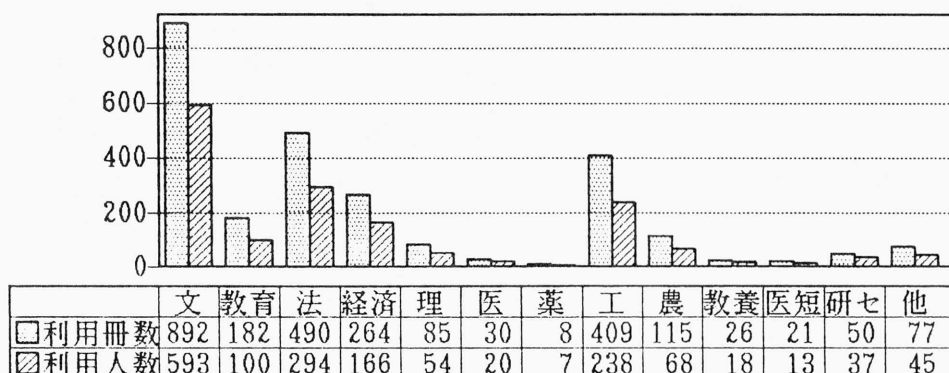
参考図書利用状況

年間閲覧冊数	2,649 冊
年間利用人数	1,653 人

※自由接架による閲覧利用は不明

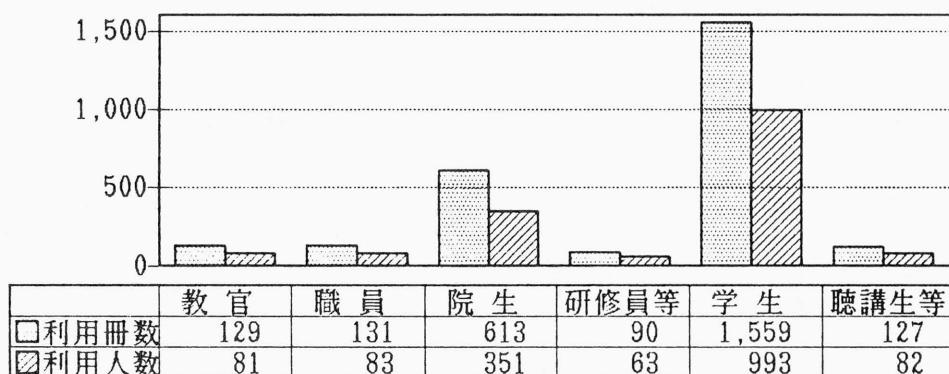
部局別一時貸出利用

(単位：冊、人)



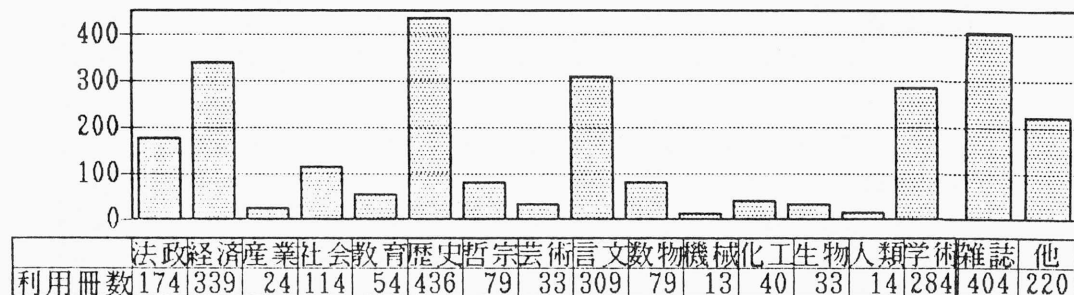
身分別一時貸出利用

(単位：冊、人)



分類別一時貸出利用

(単位：冊)



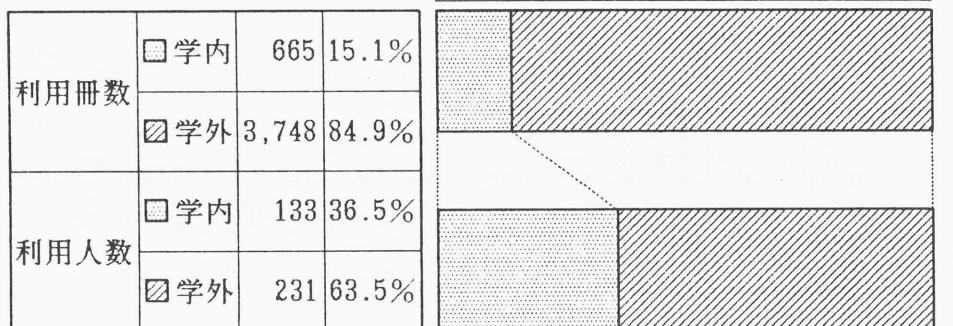
特殊資料利用状況

貴重書利用状況

年間利用冊数	4,413 冊
年間利用者数	364 人

貴重書閲覧の学内・外利用構成比

(単位：冊、人)



★貴重書閲覧上位リスト★

1. 貴重和書（文庫以外の和書のうち貴重書に指定されたもの）
2. 近衛文庫
3. 中院文庫
4. 平松文庫

★貴重書利用上位5タイトル★

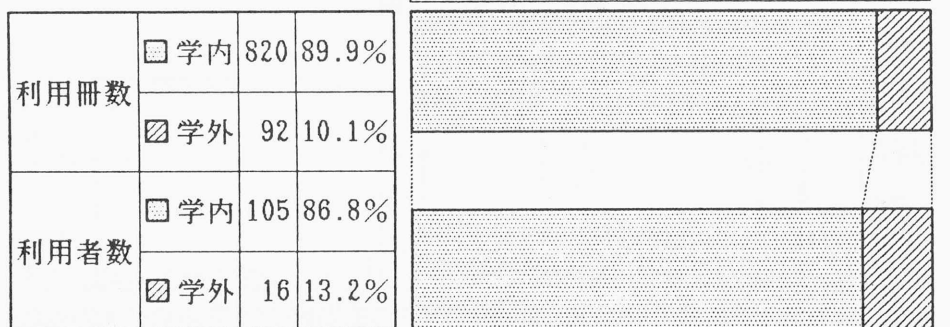
1. 天正遣欧使節肖像画
2. 国女歌舞伎絵詞
3. 吉田松陰木像
4. 下毛野氏系図
5. 奇兵隊日記

マイクロ関係資料利用状況

年間利用冊数	912 冊
年間利用者数	121 人

特殊資料の学内・外利用構成比

(単位：冊、人)

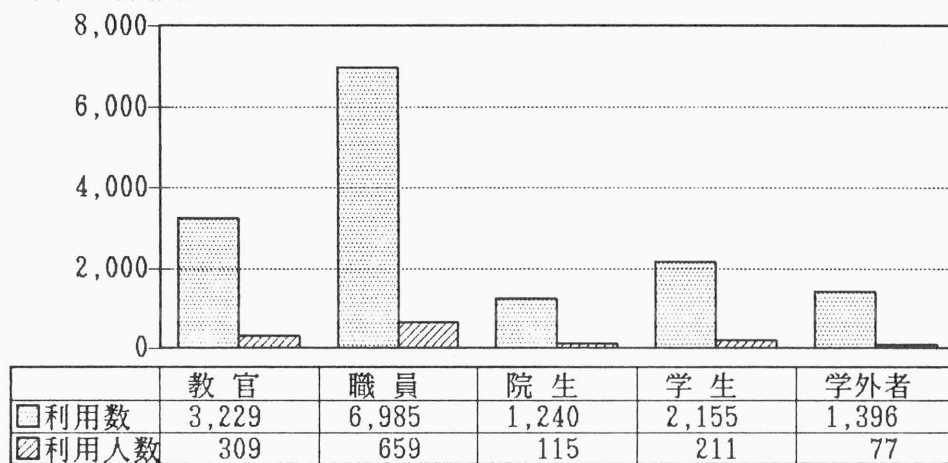


新聞利用状況

年間総利用数	15,005 冊
年間利用人数	1,371 人

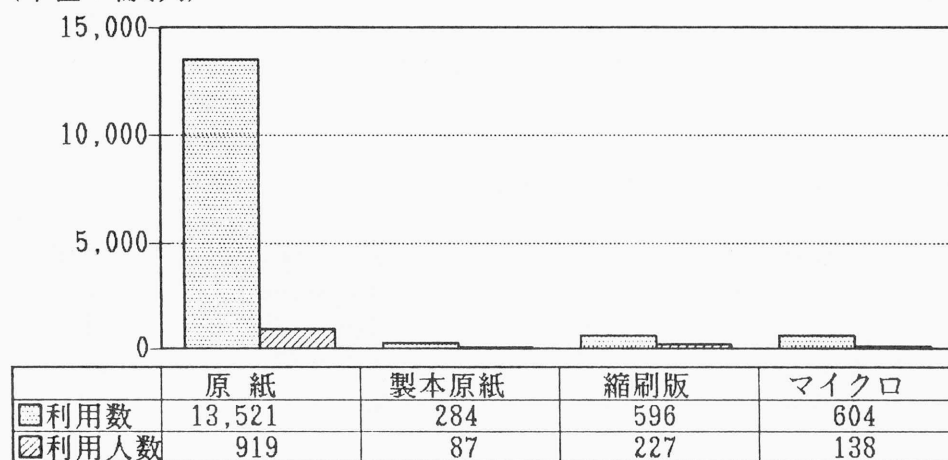
新聞閲覧構成員別利用状況

(単位：冊、人)



新聞閲覧形態別利用状況

(単位：冊、人)



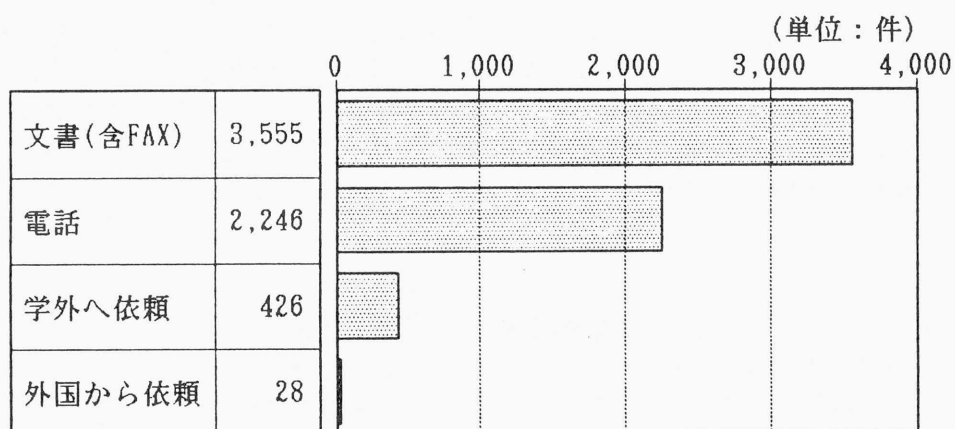
Ⅵ. 種々の利用統計

AV資料利用状況

利用回数	3,294 回
実質利用者数	537 人
利用者1人当り利用回数	6.13 回
1日平均利用回数(平日)	13.8 回
1日平均利用回数(土曜日)	5.1 回
利用者一人当り平均使用時間	75.0 分
ビデオとLLの利用回数比	55 : 45

参考業務利用状況

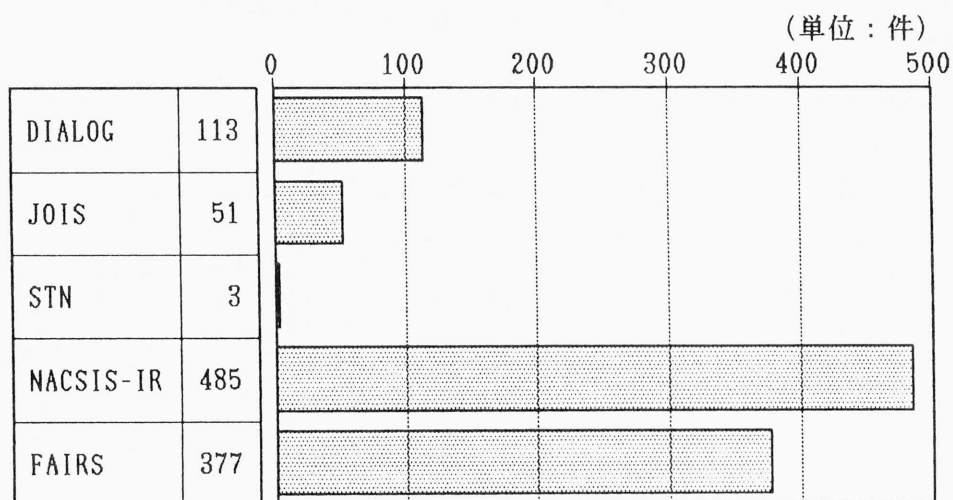
文献調査	6,255 件
------	---------



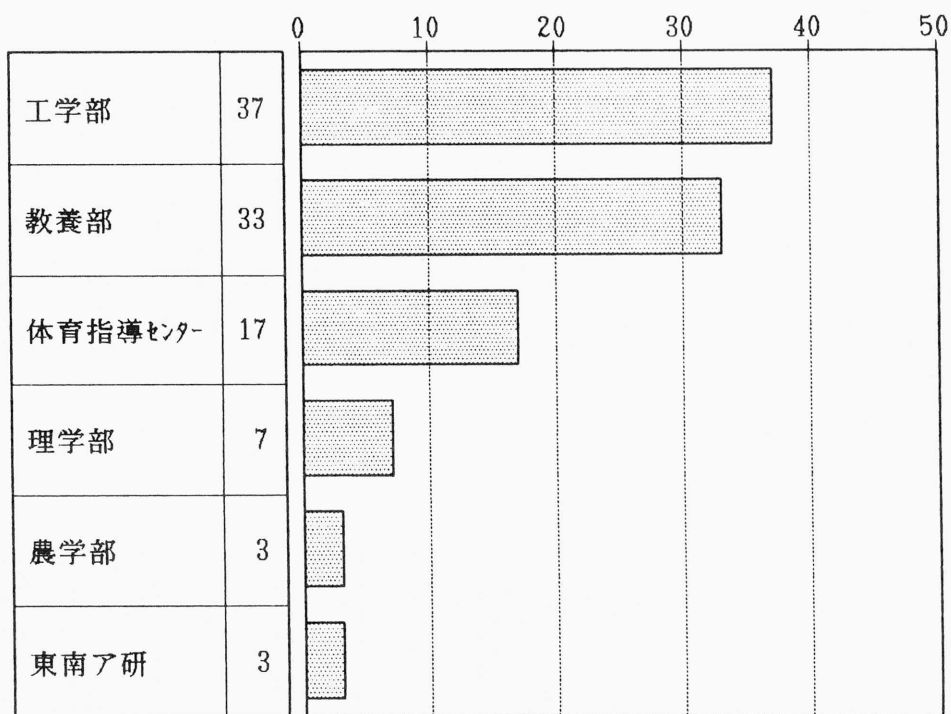
★文献調査受付上位10機関リスト★

1. 立命館大学	262件	6. 関西学院大学	107件
2. 同志社大学	229	7. 関西外国語大学	83
3. 関西大学	167	8. 神戸女学院大学	66
4. 筑波大学	156	9. 鳥取大学	63
5. 島津製作所	133	10. 東北大学	59

代行検索	1,029 件
------	---------



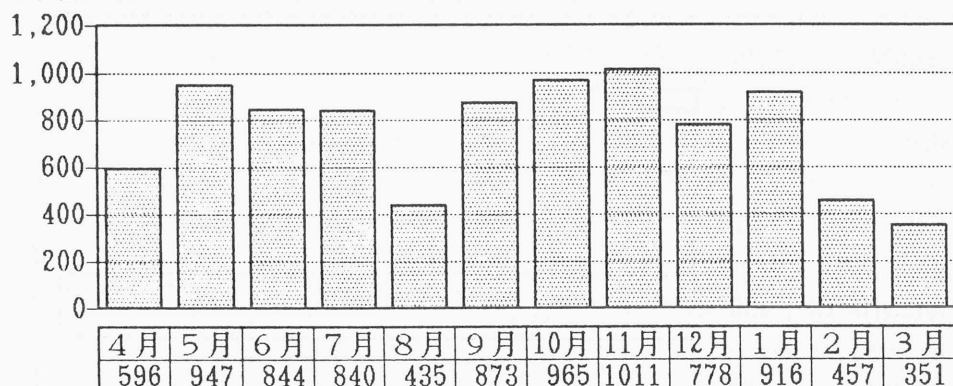
DIALOG,JOIS,STN の代行検索学部別利用



OPAC (TSS) 利用状況

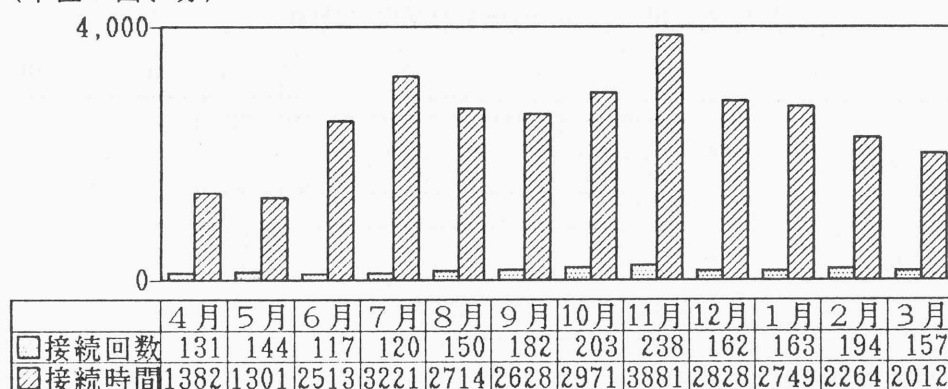
ILISオンライン（接続時間）：図書館利用者用専用端末

(単位：分)

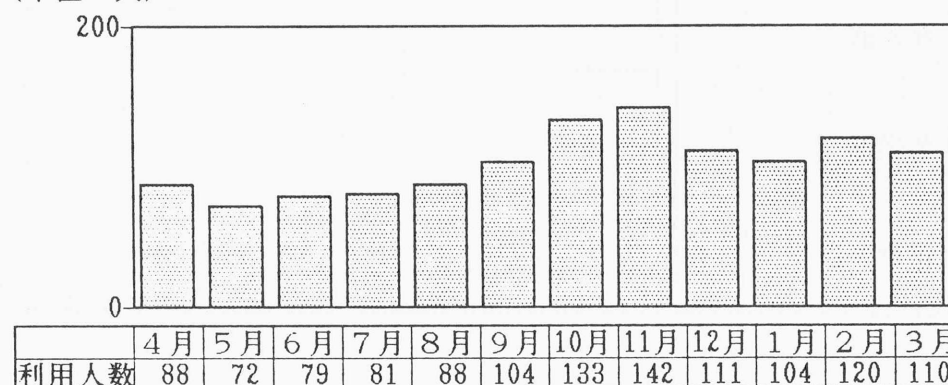


OPAC利用者接続状況：研究室利用の一般端末（TSS）

(単位：回、分)



(単位：人)

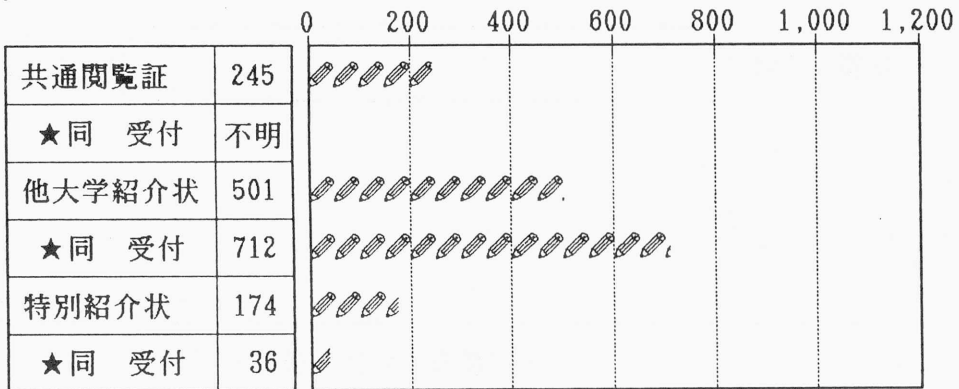


相互利用状況

他大学図書館訪問への紹介 920件

50

(単位：件)



※ 共通閲覧証：国立大学間共通閲覧証

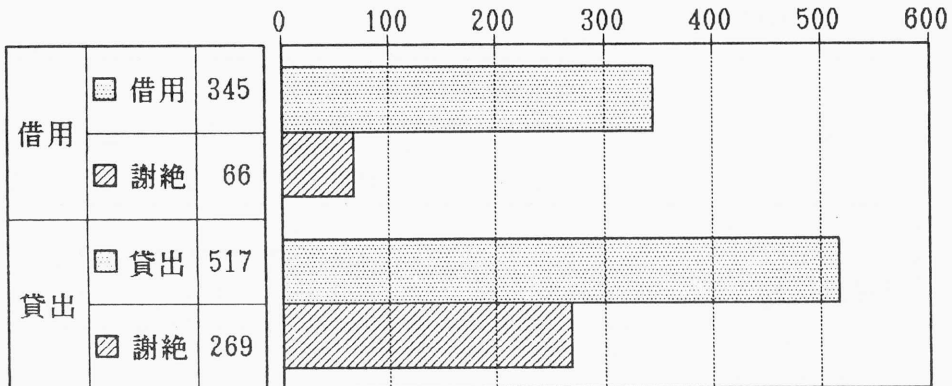
他大学紹介状：他大学図書館紹介状

特別紹介状：旧七帝大附属図書館間夏季休暇中の特別紹介状

★：学外者閲覧受付記録による

現物貸借 1197件

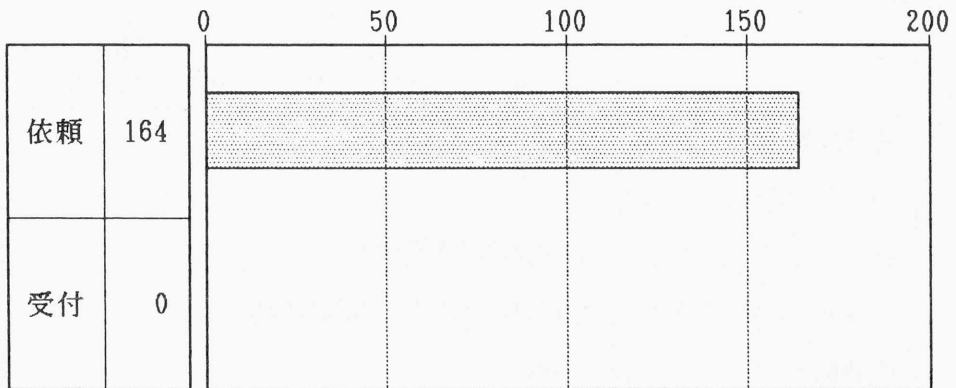
(単位：件)



文献複写	12,236件
------	---------

(1) 対国外

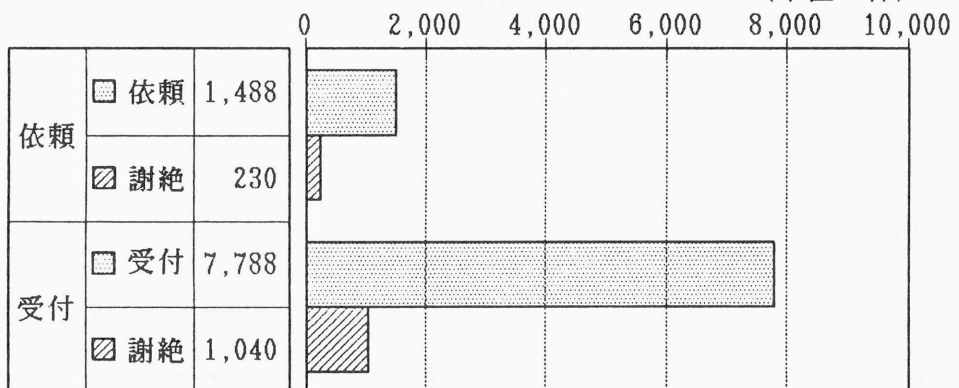
(単位：件)



* 文献複写対国外受付不可

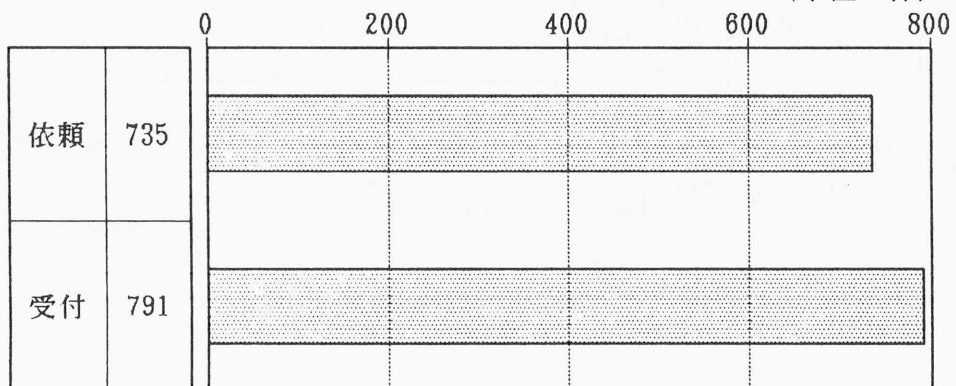
(2) 対国内

(単位：件)



(3) 学内 I L L

(単位：件)



VII. 予算統計

(単位：千円)

1. 平成3年度決算

584,628

(内訳)

図書館資料費	122,136
製本費	2,792
図書館運営費	459,700

A. 図書館資料費

122,136

(内訳)

図書購入費	39,555
雑誌購入費	82,581

(うち外国雑誌センター分 49,000)

B. 図書館運営費

459,700

(内訳)

人件費	332,012
備品・消耗品費	17,480
光熱水料	35,217
通信費	2,400
印刷費	4,366
賃借料	39,684
その他	28,541

2. 平成3年度図書館資料費文部省配当・学内措置比率

(外国雑誌センター分を除く)

文部省配当分	64%
学内措置分	36%

3. 参考

A. 平成3年度大学決算（「京都大学概要平成4年度」による）

84,672,826

B. 平成3年度全学図書館（室）決算

(「平成4年度大学図書館実態調査」による)

2,657,839

(内訳)

図書館資料費	997,196
図書館運営費	1,660,643

利用統計等について（解説）

本稿では、予算統計を除く年間統計について若干の解説を行うが、全項目について網羅するものではない。見出しのあとに括弧で示した頁は、該当の統計が掲載されている箇所である。

1. 蔵書数について（3頁）

京都大学には、附属図書館（中央館）、学部図書館（室）、研究所図書室、センター図書室等（後三者を、以下「部局図書室」という）60を越える図書館（室）があり、部局図書室はそれぞれの学部、研究所等の長のもとに運営されている。こうした組織形態のなかで、附属図書館は、本学図書館システムの中央館として、「調整された分散方式」をめざして、これらの図書館（室）の連絡調整をおこなう役割を果たしてきた。

平成3年度末現在の京都大学全体の蔵書数は、506万冊であり、附属図書館の蔵書は、そのうちの15%程度の74万冊である。所蔵冊数の多い部局をあげれば、文学部72万冊（14%）、総合人間学部53万冊（11%）、法学部51万冊（10%）、人文科学研究所45万冊（9%）となる。国立大学で比較すると、東京大学の660万冊（注1）に次ぐもので、3番目の九州大学、東北大学の300万冊とは大きな差がある。歴史の古い大学であることを物語るひとつの材料であろう。

和洋の構成比は、全学で11:10、本館で19:10である。本館が、学部生を中心とした利用者の多いことや、古典籍などの和図書の多いことなどから、全学的にみても和図書中心の蔵書構成となっている。

本館の開架図書冊数は7.2万冊で10%の開架率であり、全国的には九州大学78%、名古屋大学70%、大阪大学23%となっており、東京大学の12%に次いできわめて低いものである。しかも、現在開架図書室は収容限度に近くなっていることから、大幅な増加は難しい。ただ、自由接架の図書が増えるのは利用者にとって、好ましいことには違いないが、図書館資料の性格等からの判断も必要となろう。

蔵書鮮度数とは、年間受入冊数を蔵書冊数で割ったものである（注2）。平成3年度の本学の受入冊数は9.4万冊、本館は1.4万冊であるから、蔵書鮮度は、それぞれ0.019、0.019となる。国立大学の全国平均0.026にくらべると、かなり鮮

度の落ちた蔵書といえる。蔵書鮮度数が大学図書館評価基準として、どういう位置づけをされるのか不明であるが、歴史が古く蔵書数の多い図書館は、比較的蔵書鮮度数が低くなることは容易に想像できるし、年間受入冊数が蔵書数に見合って年々増加しない限り、蔵書鮮度数の値自体も減少していくことになる。

また、本館における利用者一人あたりの蔵書冊数、年間受入冊数は、それぞれ31.8冊/人、0.6冊/人であるが、後者はとくに、購入図書に限定すれば、0.1冊/人（10人に1冊）で、ここ数年購入図書は減少傾向にある。

2. 利用対象者と開館状況について（5頁）

利用対象者は、本館では、大学の構成員である教職員、大学院生、学生、研修生、聴講生等のほか、卒業生、退職教職員等も含んでいる。わずかではあるが、ここ数年増加の傾向にある。本館は利用登録制を採用しており、通常は登録者に利用証（利用者カード）を発行している。これにより、利用者は自由に入退館できる。

利用者サービスの重要なポイントである開館時間については、大学の理想（教育と研究の機会の最大化）と図書館の現実の制約という二つの相反する要件を調整された所できめられる（注3）。しかも開館日・開館時間を多くすることが、図書館評価の重要な要素となるという見方もあるが、平常サービスを伴わない場所貸し開館と、種々のサービスを伴う開館とは同列には扱えない面もあり、評価の難しいところである。

本館における現在の開館時間は時間外開館を含め、平日で12時間、土曜日で7時間である。国立大学のうち、3時間以上の時間外開館している図書館は、92.7%にのぼる。しかし、米国の大学図書館の開館時間は、平均で平日14～15時間、週末8～9時間（土曜日9 a.m.～5 p.m.、日曜日1 p.m.～10 p.m.または11 p.m.）である。その開館時間の長さには驚くが、米国の司書数はわが国の1.5倍であり、その様なサービス状況を作りあげている背景を忘れて、単純には比較できない（注3）。今後、本館においても、日曜開館が問題となるだろう。

現在の時間外開館とは、平日の午後5時以降、及び土曜日を指す。時間外開館の業務内容につい

ては、量的にもっとも多い図書や雑誌の貸出・返却などが、平常開館時と同程度のサービスとして行われており、参考調査やILLの受付、特殊資料やAV資料の利用などが、除外されている。

特に、図書館の現実の制約の中に、アルバイト要員の確保の問題が常に存在し、これが制度的に解決されなければ、人的サービスを伴う開館日・開館時間の急速な延長は望めないだろう。

3. 入館利用状況について (6頁)

入館者数は、前年度比1.9%の微増である。座席数は876席で3年間の増減はないので、座席回転数は、約750である。1席を750人が使ったことになる。これを日別入館者数で見ると、1日1席あたり、2.8人が使用したことになる。

4. 一般図書貸出利用状況について (7頁)

文献提供サービスとしての貸出は、卒業生を除く利用登録者がその対象となり、学外者への貸出サービスは対象としない。貸出密度(注4)は3.4冊で、前年度比で6%減である。1人3.4冊の図書を貸出したことになる。

全蔵書の回転率(注4)は0.1冊で、全蔵書のうち10冊あたり1冊が貸出されたことになる。開架図書の回転率は1.0冊で、全蔵書の回転率の約10倍となっている。高回転率の図書は、「中国古典文学体系第40巻」で、本年度に21回、第2位は、Moore, W.J.「物理化学(上)」、志賀浩二「複素数30講」の17回、第4位は、皆川洸「国際法判例集」の16回、それぞれ貸出された。10回以上貸出された図書は234冊、貸出され総回数は3,010回で、貸出冊数全体の4.3%に達した。

分類別に貸出状況を見ると、貸出総数の23%は数学・物理で、2位の言語・文学の11%を大きく上回っている。しかし、全体で見ると、理系と文系との比率は、5:6で後者が多い。

一方、未返却図書に対する返却督促は3,451件で、督促率は4.3%である。また、郵送料金は141,491円に達しており、今後、私学に於いて実施されているような郵送料の個人負担も、考慮していく必要があるのかも知れない。

5. 閲覧利用状況について (9~13頁)

閲覧利用サービスは、利用登録者の他に、国公私立大学、研究機関、一般市民等の学外者も対象とされる。閲覧利用者率、閲覧利用冊数率、閲覧

利用率(注5)は、それぞれ0.4、1.8、4.0で、登録者の4割が図書館を利用し、登録者は1人当たり1.8冊の図書を閲覧し、閲覧者は1人当たり4.0冊の図書を閲覧したことになる。

本統計は、閲覧手続をしたもののみで、開架されている図書の実際の閲覧数は正確に把握できない。調査方法として、閲覧室に残された資料を確認するとか、調査をするとかの方法はあるが、当館では実施していない。ある調査では、貸出データの6倍という数字が算出されている(注6)が、これを当てはめれば、本館では48万冊の閲覧利用があったものと推測される。これに従うと、実質的閲覧利用率は20.6冊となり、1人の閲覧者が20.6冊の図書を閲覧したことになる。

学内者と学外者の利用人数比率は、68:1であり、閲覧冊数比率は44:1である。

雑誌利用については、前年度比で11%増であるが、閲覧統計と同じく手続をしたものみの集計である。開架雑誌の利用は非常に多いようであるが、統計上あらわれない。利用件数の比率は、本館の通常分42.7%、バックナンバーセンター(BNC)分39.1%、外国雑誌センター分3.4%、工学部に所属する化学系雑誌分14.7%である。外国雑誌センター分の利用の低さがめだつが、レアジャーナルの収集が基本になっている以上やむを得ない面もあろう。学内者・学外者の利用比率は、9:2である。図書の閲覧利用者の比率と比較すると、学外者の利用が多くなっている。

貴重書の利用は、前年度比50%増である。新規貴重書の指定は平成3年度は21点であった。貴重書利用には2つの特徴がある。年ごとに利用が定まらないものと、学外者の利用率が高いものである。貴重書を数多く所蔵する本館としては、今後もその利用が増加していくと思われる。

6. 種々の利用統計について (14~18頁)

A. 参考調査業務について

利用者は利用登録者に限らず、一般市民等も含んでいる。他機関からの文献調査受付件数は、前年度比12%増である。本統計にあらわれているのは、情報サービス課に設置されたFAXや、参考調査掛で受付した電話、手紙、ハガキなどによる申込の件数のみであり、インフォメーション・カウンター、参考調査カウンター、その他の掛で受付したものは、ここには計上されていないし、カウンター業務における一般的な案内、館内施設の

利用説明、カード目録検索の説明なども含まれていない。文献調査を中心とした探索質問、調査質問のみの統計であることをことわっておきたい。

本館から他機関への調査依頼できるのは、学内の利用登録者に限られ、所蔵調査や事項調査が中心となっている。調査依頼の件数は、前年度比121%増である。所蔵情報の調査を他機関に依頼する傾向が強くなっており、本学で所蔵していない資料が多くなっていることを示しているといえよう。しかしながら、利用登録者の利用率は0.02人にすぎない。

参考調査の受付件数と依頼件数の比率は、13：1となっており、圧倒的に受付が多い。

情報検索サービスについては、近年、検索希望者が直接検索するケースが増えており、その教育訓練をする図書館が増加している（注7）ようであるが、本館では図書館員の代行検索を実施している。検索の申込は、前年度比3%増である。利用登録者の利用率は4%にすぎない。利用する検索システムは、NACSIS-IRが特に多くなっている。これは、NACSIS-CATの休止日に、このIRを使って所蔵調査を実施しているためであるが、全体としても、増加傾向にあり、今後も必要度が増していくだろう。

情報提供のニーズに対する充足度や、情報の一定時間内の提供率などは、統計がとれていない。また、研究者は自室からも直接各種データベースにアクセスできるので、図書館員による代行検索は、その手段を持たない研究者や大学院生に限られる。この代行検索は、その支払を校費に限っており、私費による支払を認めていないことが現在の大きな問題点である。

所蔵資料のオンライン目録検索は、電子的にアクセス可能なカード目録にすぎないが、主題からのオンライン目録検索導入のインパクト調査によれば、導入によって、図書館利用者のオンライン利用の構成比を増加させると同時に、目録利用が全般的に上昇していくという（注8）。本館のシステムは、キーワードによる主題検索が主体となっている。

平成3年度は、館内に利用者専用の検索端末が12台（現在、14台）設置されていたが、昭和60年度以降は本館受入図書が目録がカードレスになっているため、端末利用は増加している。端末の使用状態については、端末利用者が時間的に集中するために、検索待ち時間が長くなっている傾向が

ある。検索できる目録データは、本学を含め近畿北部地区国立大学の6大学が所蔵する図書や雑誌のデータである。利用サービス時間は平日8時間で、土曜日3時間であった。現在は、土曜日がサービス短縮となっているために運用していない。したがって、オンライン検索ができない時間帯は、システムで作成した冊子体目録を端末の近くに配置して、検索の便を図っている。

研究室からのオンライン目録検索（OPAC/TSS）に利用登録している利用者は、平成3年度末で215名であるが、前年度比で32%増加している。接続端末の種類は問わないが、通常のパソコン通信ができるものであればよい。また、利用できる目録データは、館内設置の端末と異なり、京都大学所蔵資料のみである。利用サービス時間は、館内端末と同じである。

CD-ROMによる情報検索サービスについては、現在、IBM系1台とPC98系1台の計2台で実施している。サービスしているソフトは、IBM系6種類、PC98系4種類であるが、利用統計はとっていない。このサービス部門は、将来的には、機器の充実により、サービス時間の延長や、学内LANを経由した検索サービスをおこなうことで、大学図書館が電子図書館として大きく変貌する可能性を秘めている。利用サービス時間は、目録端末の利用時間より短く、参考サービスカウンターの開かれている時間で、平日7時間である。

B. 相互利用業務について（17頁）

資源共有の理念に沿って、図書館資料の利用拡大をめざした種々のサービスが、相互利用業務として行われている。

国立大学図書館間共通閲覧証の発行は、前年度比8%増である。年々、2～7%の増加傾向にあるが、発行の条件が大学院生以上の学生、教職員に限られるため、本学の資格者は10,018人となり、発行率はわずか2.4%に過ぎない。

他大学図書館を直接利用するための紹介状の発行件数は、前年度比15%増である。利用登録者数に対する発行率は2.7%で、前年度比10%増である。

現物貸借のうち貸出については、本学の全蔵書（部局図書室と本館の所蔵冊数比は、86：14）がその対象になるが、事務処理は、本館の相互利用掛が全て行うために、貸出する資料を集めるために、係員が部局図書室を駆けめぐることになる。

他機関への借用申込数は、前年度比40%増である。そのうち、貸出に応じてくれたものは84%であり、謝絶されたものは16%である。

他機関より本館に借用を申込んできた件数は、前年度比15%増であるが、実際に貸出したものは65%であった。前年度比で17%増であるが、全体を通して見ると、借用に比べ貸出が減少している。本学から他大学への貸出件数は65%で、借用件数は84%であり、借用するケースが多い。貸出を謝絶したものは35%（前年度比12%増）で、若干増加している。しかも、他大学から謝絶される率よりも、本学が謝絶する率が高くなっている。

文献複写については、受付する部局図書室もあるため、現物貸借に比べ、係員が部局図書室に足を運ぶ回数は若干少なくなる。国外に複写申込する件数は、前年度比23%増であるが、利用者率は0.9%にすぎない。国内への申込は、前年度比15%減で、利用率は9.3%となっており、国外への申込の10倍の件数である。このうち、複写物が入手できたものは87%で、入手不可は13%であった。

一方、本館が国内から複写を受付けた件数は、前年度比9%減である。そのうち、応じられたものは88%で、謝絶したものは12%である。図書の現物貸借の謝絶率35%との差は、現物貸借の難しさを示すものといえる。

7. その他

本統計以外に、いくつかの点について触れておきたい。

まず、留学生等の利用についてであるが、全国の国立大学における留学生の受入数は、平成3年度で14,224名である（注9）。本学での受入数は、このうちの5.7%を占めるが、人数は前年度に比べ5%増加している。外国人研究者、外国人研修員は644名で、前年度比7%減である。

留学生、外国人研究者、外国人研修員に対する特別なサービス体制はとられていないが、彼らは自国の新聞や雑誌、日本語教材や日本事情についての図書、テープ、ビデオ等の利用を希望している。母国語による利用案内を用意したり、日本語の案内に平仮名のルビをふるなどの配慮も必要とされている（注10）ことから、本館でも検討していく必要がある。

利用案内については、インフォメーション・デスクに専任の担当者が1人が配置されているために、本館における指示的利用サービスの面では問

題ない。印刷物としては、平成4年度まで「新入生のための Library Guide」が新入生全員に配布されている。「附属図書館利用案内」は、希望者に配布するものである（平成5年度は新入生にも配布）。オリエンテーションは現在検討中であり、平成5年度には実施する予定である。

展示会については、大学の所蔵する資料の一般公開という目的も含めて、毎年開催している。本年度の展示会は次のとおりであった。

開催日：11月14日～11月22日

テーマ：東南アジアの文字と文献

入館者：1,634名（学外者を含む）

開催に当たっては、出展目録の印刷、展示案内の作成、出展準備、受付アルバイト等に労力と経費がかさんだが、国民的課題である生涯学習の一翼を担う大学として、こうした資料公開や市民開放を実施していくことは、きわめて意義のあることであろう。

（注）

1. ここで引用した他大学や全国の統計は、特にことわらない限りつぎのものを利用した。

日本の図書館1992, 日本図書館協会, 1992

平成3年度大学図書館実態調査結果報告, 文部省学術情報課, 1992

2. 図書館サービスの測定と評価, 森耕一編, 日本図書館協会, 1985, p. 267

3. 大学図書館の管理と運営, 岩猿敏生・大城善盛・浅野次郎著, 日本図書館協会, 1992, p. 118

4. 図書館ハンドブック第5版, 日本図書館協会, 1990, p. 373

5. 国立大学図書館における自己点検・評価について：よりよき実施に向けての提言, 国立大学図書館協議会自己評価基準検討委員会ワーキンググループ, 1993, p. 7

6. 図書館サービスの評価, F.W. ランカスター著, 中村倫子・三輪真木子共訳, 丸善, 1991, p. 66

7. 同上, p. 149

8. 同上, p. 104

9. 文部省統計要覧平成4年版, 1992

10. 図書館はいま：白書日本の図書館1992, 日本図書館協会, 1992, p. 97

（参考調査掛）

予算統計について（解説）

1. 図書館予算について

附属図書館の予算は、文部省から配当される図書購入費（図書館資料費）、図書館運営費、および学内予算の一部から補充される経常経費である。なお、学内措置分は、図書購入費（図書館資料費）と図書館運営費の両方に補充されているが、ここでは、図書購入費のなかで明らかにする。

2. 全学図書館（室）決算について

全学図書館（室）決算は、大学図書館実態調査票を集計したものであるが、大学決算との比率をみると、大学決算の3.1%でしかない。全学の資料費の合計にいたっては、大学決算比1.2%である。

大学基準協会の「大学図書館基準」（1952年）によれば、図書館の総経費は大学の経常費総額の4%以上とされており、私立大学ではこの基準に示された比率を維持しているという。しかし、国立大学では1975年以降、この基準を下回っているという（注1）。このことは、本学においてもあてはまる。

3. 附属図書館決算について

附属図書館決算は、大学決算比で0.7%である。全学図書館決算比では、22%を占めている。

図書館資料費は、附属図書館決算の20.9%であり、うち図書購入費は、図書館資料費の32.4%である。図書購入冊数は、4,684冊であり、受入冊数の33.8%にあたる。

図書購入冊数のうち継続物は20.5%あり、金額

において41.8%を占める。これは、昨今の出版状況（単行書より、叢書物ならびに講座物で出版されていく出版社の経営戦略）を反映しているものであるが、学生用図書購入費が減額された今年度においては、新刊の単行書の購入にしわ寄せが来たと考えられる。因に、平成元年度は、図書購入冊数は6,597冊であり、受入冊数の86.3%を占めた。図書購入冊数のうち継続物は16.7%あり、金額において30.2%であった。

以上のことから、図書購入費が減額され、購入図書が減ってきたうえに、継続物が増える傾向にあって、新刊単行書の購入にしわ寄せがきており、蔵書に新鮮さがなくなってきているといえる。

他方、雑誌購入費（逐次刊行物、視聴覚資料、電子資料を含む）は、図書館資料費の27.1%（外国雑誌センター分を除く）を占め、今後増える傾向にある。なお、外国雑誌センター分は図書館資料費の40.1%を占める。

4. 文部省配当・学内措置分の比率について

附属図書館図書館資料費のうち、文部省配当分64%に対して、学内措置分は36%となっている。平成元年度では、文部省配当分69%に対して学内措置分は31%であった。いわゆる「持ち出し」が増えてきているといえる。

（注）

1. 図書館はいま：白書日本の図書館1992，日本図書館協会，1992，p. 106

（図書受入掛）

あとがき

本誌では毎年本館の利用統計についての記事を掲載してきました。本年度は、「まえがき」にあるように、これまでの詳細な統計を見直して、よりコンパクトで有効な統計を作成したことから、これに予算統計を加え、本誌の特別号として発行することにしました。

一方、本学においても、大学の自己点検と自己評価に向けて委員会が発足しましたが、本館としてもこれからその項目を設定し、点検・評価を開始しようとしています。すでに、いくつかの大学図書館において、図書館白書や年次報告の形で自己点検や自己評価が行われていますが、本館においても今回の統計を手がかりとして、点検・評価

を盛り込んだ年報を作成する計画です。

また、この3月には、国大図協の自己評価基準検討委員会により、点検・評価のためのガイドラインが作成されました。したがって、今後はこれを参考にしながら、本学の図書館についてのガイドラインを設定していく必要があります。

年報は、こうしたガイドラインに基づいた自己点検・自己評価を含むと同時に、これからの図書館運営に有効な統計やその分析を内容とするものでなければなりません。来年度にはこれを実現するために、ワーキンググループを組織して検討をはじめの予定です。